

巻頭言

私たち国際マンガ研究センター(以下IMRC)は、その名の通りグローバルにマンガに関する研究活動を推進している。2022年の活動を振り返ると、マンガというものが改めて私たちの身近なものであり、社会の動きをよく反映するものだと感じる。

この1年間について考えたとき、誰の脳裏にもまず浮かぶであろう社会の出来事は、やはり3年以上にも亘るコロナ禍に、ようやく終息の兆しがみられていることであろう。この社会の変化は、実はマンガの消費量にも表れている。日本のマンガの市場規模は、コロナ禍が始まった2019年から巣ごもり需要で爆発的な成長を遂げたが、2022年には落ち着きをみせたのである。この動きを具体的な数値でみてみると、マンガ市場の規模は、2019年には4,980億円(電子+紙)であったが、2020年には6,126億円にも及び、2021年には6,759億円、2022年には6,770億円と微増に留まった。というものの、この数値は歴代最高を記録しておりマンガの人気はかつてない高まりをみせている。

IMRCでは2020年より毎年、安齋科学・平和事務所、立命館大学国際平和ミュージアム、京都国際マンガミュージアムとの共催により、「マンガ・パンデミックWeb展」を実施してきた。世界中からプロアマを問わずに、「平和」をコンセプトとして、われわれ人類がパンデミックにどのように向き合っているのかをテーマに、オンライン上で作品を募集して展示を実施してきた。これまでに世界50カ国・地域を超える300組以上のマンガ愛好家から1,800にも及ぶ作品が寄せられた。その作品達は、1コマものからストーリーマンガまで多岐にわたり、「その時」を克明に刻むものであった。現在、われわれは新しい生活スタイルを築きつつある真っ最中である。今後、われわれがこの時代を歴史として振り返ったとき、これらの作品達はこういったメッセージを将来に語りかけるものになるだろうか。マンガの表現力は大変興味深い。さらに2022年は作品募集のテーマとして「平和」を強調する形をとった。2022年が「平和」や「戦争」について考える年になったことは言うまでもない。現在(2023年3月時点)、応募された作品達をオンライン上で展示しているのでぜひご覧頂きたい(<https://www.mangapandemic.jp>)。

そして日本のマンガをはじめとしたポップカルチャーの人気の健在ぶりを示す出来事があった。新型コロナウイルス感染症の影響で2年間中止されていた、ヨーロッパ最大級の日本文化のイベント「ジャパン・エキスポ」が、3年ぶりに7月にフランス・パリで開催された。盛大な同イベントの開催を待ちわびていた多くのアニメ・マンガファンが、ヨーロッパ中から集結して、その来場者数は最終的に254,000人にも及び大いなる賑わいをみせた。2022年の後半になってから、世

界的にコロナ禍が落ち着いてきたことを感じさせるように、IMRCにおいても今後の展開を見据えた海外とのやりとりが一気に活発化した。フランス・アルザス地方にヨーロッパ最大の日本アニメとマンガのミュージアムを創設する計画が本格的に始動して、10月にその計画の中核機関であるアルザス日本研究欧州センター(CEEJA)と、京都精華大学は学術交流に関するMOUを締結した。当該ミュージアムの創設には、IMRCのこれまでの知見を駆使して全面的に協力していきたいと考えている。ヨーロッパにおいて広く一般に、イベントといった一過性な形ではなく、恒常的にマンガの情報を発信する施設として、その伝播力が大いに期待される。IMRCは、これまでマンガの研究基盤の人的・情報ネットワークの形成をグローバルに推進してきた。コロナ禍によって奇しくもオンラインの活用が飛躍的に上達したわれわれであるが、2023年はオンラインの良さも併用しながら、リアルな活動も増大させることを計画しており、引き続き関係の皆様のご支援をお願いする次第である。